

ある日の出来事 5 ある日
のローフィス（緊急隊長会
議）





左将軍ディアヴォロスの隠れ家のような平屋煉瓦の瀟洒な別宅へと馬を乗り入れ、四人は音も立てずに近寄る場丁に手綱を渡し、いつものように四段ある石段を登って扉を開け、中へと入る。

がその時扉の向こうの長身の男が、中へ入る一同を出迎えた。

ローフィスがその男の顔を見てつぶやく。

「オーガスタス...！」



「思いの外早かったな。」

中へ入れ。ディアヴォロスがお前達に用がある」

自分よりも更に背の高い一つ年上の、赤毛をライオンの鬣のように揺らす悪友の様子に、ギュンターがその玄関広間を見渡し呻く。



「...他の奴らは？」

「帰した。報告会は延期だ」

オーガスタスのその素っ気ない言葉に、ディングレーもそう思ったしアイリスも嫌な予感がしてつい、お互い顔を見合わせた。





オーガスタスは窓の並ぶ白い壁と焦げ茶の床の廊下へと背を向け歩き出して一同を促し、ローフィスは2メートルを越す身長の子の、隣を歩きながら見上げ、いつも朗らかな笑顔のその男が笑って無いのを見、声を落としささやく。

「ムストレス派から横やりか？」

オーガスタスはようやく、笑った。

「推察がついてるみたいだな？」

ギュンターが、ローフィスの背後から後に続きぼやく。

「俺がヘマった。

ディアヴォロスに文句をぶつけたのか？ 奴ら」

ディングレーがアイリスを見、アイリスは足を止めたまま肩をすくめる。

「会議でフォルデモルドを敵に回した件じゃないのか？」

その四つ年下の優雅な大貴族の言葉に、オーガスタスは赤い髪

を振って振り向き、笑う。

「その件だ。だがディアヴォロスはお前を褒めていた。

どうせローフィスにまた、フォルデモルドは嫌がらせしたんだらう？」

ディングレーはアイリスを見、アイリスはオーガスタスにつぶやく。

「だが結局ディアヴォロスを煩わせた」

殊勝にもそう言うアイリスを、ディングレーはつい見つめたし、オーガスタスは笑って、ディングレーに顎をしゃくる。

ディングレーはオーガスタスに頷くと、アイリスの背に手を回し、中へと促しながら言った。

「そうかどうかを、本人の口から聞け」

アイリスは少し子供のように口を尖らせた。

「彼は大人だから、私の非を責めるもんか」

ローフィスが振り向くと、アイリスにつぶやく。

「俺の為なんだから、奴らの文句は全部俺が聞いてやる」

途端、オーガスタスが明るい髪の親友に少し屈んで告げる。

「ディアヴォロスも同席する。」

文句は彼が聞く気だ」

皆がついそう言った、ディアヴォロスの右腕で良く見知ったライオンのような男を目を見開き、見つめた。

「開けるぞ！」

オーガスタスが言って扉を開ける。

いつもの広間で無く私用の書斎に通され、四人はついその重厚で品格ある調度の配置された室内で振り向く、オーガスタスと並ぶ程長身の、黒髪の魅力的な人物を見つめた。



浮かぶ透けた、グレーともブルーとも、グリーンとも取れる独特の瞳が室内に入り来る皆を見つめる。

彼は微笑(わら)っていた。

誰よりも先に、一番後ろに居たアイリスが口を開く。

「シャーネクの子の隊の人員を我々も、引き受けると？」

察しのいいアイリスに、ディアヴォロスは微笑んだまま一つ、頷く。

「フォルデモルドが欠員でゴネたのを、君はそう言って押し戻し

たらしいな？

だがそれだけで隊員の配属先は全部は埋らず、手分けして引き受けろと言って来た。

これから出向いて、その話を付ける。

他の隊長らを帰したのは、巻き込みたく無いからだ。

こっちの数が多いと全部こちらに、押しつける気だろうから」

その低い独特の声音はいつも心に染み入るように響く。

黒い艶やかな巻き毛がゆったりと彼の胸と背を覆う。

彼は既に紺の近衛隊服を身に付けていたし、『同行する』と言ったオーガスタスの言葉を証明するように、その胸には左将軍の証、竜の彫られた銀のブローチを付けて居た。

アイリスはまだ若く、男らしいがとても美しい彼の微笑をたたえる顔を見つめ、そして横の新たな隊長ディングレーと前のギュンターに視線を振り、はっきりとした口調で告げる。

「では二人は必要無い。

私の隊に全部、引き取る」

ディングレーもギュンターも途端、年下のその男の言い様に、同時に肩を揺らし吐息を漏らす。

ギュンターが振り向き、アイリスを見つめぼやく。

「恰好の付けすぎだ！」

ディングレーも横のアイリスを見つめ、吐息混じりに言った。

「年相応に、可愛く年上の男に甘えられないのか？」

二人にじっ。と睨まれるように見つめられ、アイリスはつい声を落としてささやく。

「そりゃ。シャーネクの隊員は無法者だ。

君達ととっても気は、合うとは思うけど」

ディングレーはやっぱりアイリスの言い回しに腹が立ったが、こらえた。こっちを怒らせて、自分に投げ出させる腹だと読めたから。

だから大きく頷き、唸った。

「そうだ。俺とギュンターは、奴らと気が合う。

問題は無い」

ギュンターも首を縦に振って頷く。

「乱暴者の扱いは手慣れたる。

お前相手じゃ奴らは腹を立てても殴れなくてストレスが溜まり、却って気の毒だ」

オーガスタスはくすくす笑ったし、お互いを庇い合うその猛者達

にローフィスも首をすくめた。

ディアヴォロスは会話をじっと聞き、そして口を開く。

「ギュンター。君の所には二人。

そしてディングレー。君には一人を。

そしてアイリス。

君の所にはやはり一人をお願いしたい」

ローフィスがそう言うディアヴォロスを見つめる。

「だが総勢**13**名。

フォルデモルドが一人を引き受け、残り八名はどうする？」

ディアヴォロスはやっぱり魅力的な微笑を傾け、告げる。

「あっちが分け合うさ」

ギュンターもディングレーも同時に異論を唱える。

「だが………！」

同時に言って、二人は顔を見合わせた。

オーガスタスが頷きながら二人に告げる。

「右将軍が五名を引き受け、残り三だ」

アイリスは呆れたようにディアヴォロスを、見た。

「もう、人員リストに目を通して、配置済みなんですか？」

ディアヴォロスは素晴らしい微笑を零して、アイリスを見た。

「後はムストレス准将らに言い含めるだけだ」

それが一番厄介じゃないか。と、ローフィスもディングレーも、
ギュンターも首を横に振った。

左将軍を筆頭に、馬を走らせる。

相変わらずディアヴォロスの乗馬は軽やかでしなやかで、凄まじい速度に関わらずそうは見えない程自然だった。

オーガスタスもローフィスも無言で、ギュンターもディングレーも、顔を逸らしただけで前に置いて行かれそうな速度について、言葉無く手綱を繰る。

が、ギュンターはそっと振り向くと、後続のアイリスもやっぱり軽やかな乗馬で、でも何か思案しているような表情で後に続き来る。

こんな速度で良く、考え事が出来るな。と呆れたが、そうしてる間に横のディングレーから遅れ、ギュンターはつい、足を両側に跳ね上げて、拍車を掛け愛馬を急かした。

その建物に着くと、ローフィスはそっとその周囲を見回す。

てっきり近衛所有の共同使用出来る建物へ向かうと思っていたが、アルフォロイス右将軍の私用別宅だった。

近衛の内輪の会議で決まって使われる場所で、准将クラスか、もしくは希に隊長も呼ばれる場所で、つい二つの塔のある白い豪華な建物を見つめる。

が、ディアヴォロスは馬の手綱を出迎える場丁に渡すと、正面玄関で無く左手に回り、庭に面した開け放たれた窓のその部屋へと足を、踏み入れる。

皆が無言でお互いを見合わせながら、後へと続く。

その洒落た調度の並ぶ、明るい黄色の壁紙の、クリーム色の布の張られた手の込んだ彫刻が施された椅子の並ぶ室内で、アルフォロイス右将軍の重鎮、栗毛のデーダルデスがディアヴォロスを迎え、微笑を浮かべて頷く。

「ようこそ。ご足労をお掛けしました」

ディアヴォロスは空色の瞳を細めた自分よりうんと年上の、隙の無い立ち振る舞いのその男の謙虚な態度に、一つ頷くとつぶやく。

「准将は揃っていないようですね？」

だがその奥の椅子から、ムストレスの弟、レッツァディンが立ち上がる。



「俺が兄の代理だ」

横の、若くしてその腕を認められ准将に駆け上がったムストレスの子飼いのノルンディルも、椅子に掛けたままジロリ...！と、年下の左将軍、ディアヴォロスを見つめる。



がディアヴォロスは二人の猛者の猛禽のような瞳に怯む様子無く、デーダルデスに頷き、背後の五人を室内へと招き入れる。

そしてデーダルデスに微笑みかけるとつぶやく。

「既に書状はお手元に届いたかと存じますが？」

デーダルデスは微笑むと

「確かに、受け取りました。

御任意の四人は既にギュンター隊長、ディングレー隊長。

そしてアイリス隊長の隊へと配属しました」

ガタン！

ノルンディルが立ち上がり、その暗い栗色の巻き毛の長髪を背で

揺らし、激しいグレーの瞳をディアヴォロスに突きつける。

『烈剣』と呼ばれる程凄まじい剣を振る、長身で体格のいい整った容姿の身分の高い男はだが、その冷たい瞳で相手の身を凍らせるのが得意だった。

刃(やいば)のような瞳。

ローフィスはそう思った。

が、ノルンディルはローランデが近衛に居た頃散々ちょっかいかけてギュンターを猛烈に怒らせ、酒の席でギュンターを挑発、そしてギュンターに殴りかかれ、戦闘不能な程の怪我を負わせられた。

憎むべき男の姿を、睨むディアヴォロスの背後に見つけ激しく眉間を寄せる。

唸り出しそうだな。ギュンターはつい、睨め付けて来るノルンディルのその総毛立つ様子に、嗤(わら)った。

ディングレーは横のギュンターのその、秘かな野獣ぶりについて、吐息を吐いて肩をすくめる。

そして小声で忠告した。

「...殴りかかるなよ」

ローフィスも秘かに振り向くと

「挑発に乗るな」

と押さえた声で告げる。

が、アイリスが肩を竦めた。

「左将軍かオーガスタスが、止める」

ギュンターも、そうだ。と頷く。

「あの二人は俺より素早い」

それは俊敏なギュンターのその言い切りに、ローフィスは二人に同情した。

つまりはギュンターにずっと“気”を向け、常に見張ってる。と言う事だ。

が、ディアヴォロスは相手は自分だ。と言うように、准将の視線からすっ！と横にずれてギュンターを背に隠すと微笑む。

「ここに既におられる。と言う事は、もう人員リストを手に行っている筈だ。

違いますか？」

レッツァディンが、顔を揺らす。

ディングレーも見知っている、ディアヴォロス同様「左の王家」の、一族の男。

黒髪の、面立ちの似た、だがどれをとってもごつく遅しく、激し

い気性も兄、ムストレスを上回る。

ディアヴォロスにとっても、自分同様のところに当たる。

だが年下のディアヴォロスに左将軍に地位を奪われて以来、事ある毎に、兄弟揃ってディアヴォロスに嫌がらせを仕掛け続け、その汚いやり用にディングレーはきっちり腹を立てていた。

ディアヴォロスはレッツァディンが一步前へ出て自分を睨むなり、背後でディングレーが凄まじい“気”を送りレッツァディンを睨み付けるのに気づき背後に振り向くと、たしなめるような視線を送る。

ディングレーは二つ年上のいところ、ディアヴォロスの神秘的で浮かぶような透けた瞳に見つめられ、その“気”を一気に鎮め、俯く。

ディングレーの兄ガーデンは、ムストレスやレッツァディン同様自己中心的で他を見下し、卑怯な事も平気な男だったが、弟のディングレーは真っ直ぐな気性の、つい庇いたくなる程気持ちの純粋な男で、兄の汚名をいつもその弟として受け続けても、泣き言を言ったり愚痴を言わずただじっと、信じる自分の道を着実に歩いていく。そんな男だった。

恋人シェイルの義兄ローフィスに懐き、ローフィスは懐の広い男だったから、無骨で感情表現の苦手な不器用なディングレーをずっと、面倒見て来た。

そのローフィスはとうとう近衛を去る。

義弟シェイルの為に居続けたが、自分が有能な彼を手元に置きたくて隊長に抜擢して以来、自分の敵ムストレスに嫌がらせを受け続けても、文句を言った試しが無い。

ローフィスはい、ディアヴォロスのそんな思惑に、気づいたように顔を上げる。

真っ直ぐの、明るい青の瞳。

明るい栗毛のやさ男風の外観だがローフィスの意志が、折れた事が無い程強い男だと、ディアヴォロスは知っていた。

ローフィスは少し俯く。が直ぐ顔を上げ、真っ直ぐ見つめた。

『光の国』の『光竜』をその身に宿し、誰もがディアヴォロスをカリスマと崇めたし、出会った途端その崇高な雰囲気魅了され、殆どの者が彼に平伏さずにはいられない。

ムストレスもレッツァディンもそれが、気に入らない。



『ムストレス』

自分が劣る事を決して、認める事の出来ない男達だったから。

「座りませんか？」

年長のデーダルデスは両派の若者が激しく睨み合う様子を、その思惑を読ませない空色の瞳で見つめ、そっとささやく。

低い声だったがさすが、響き渡る声色で、皆我に返って頷く。

デーダルデスがディアヴォロスに直ぐ横の椅子を勧め、ディアヴォロスはオーガスタスに頷くと、オーガスタスは横へと付き、ローフィス、ディングレー、ギュンター、アイリスの順に、ノルンディルとレッツァディンらと向かい合うように掛ける。

が、ノルンディルの横の椅子に座った大男、赤毛のフォルデモルドは、ディアヴォロスの横に座すオーガスタスに、激しい視線を送る。その横には、銀髪のララッツも居た。

ディングレーはその喰えない冷静な男が微笑を浮かべる様について、ギュンターの事も話題に上るな。と俯いた。

案の定、

「遅れてすまない」と、庭に面した両開きのガラス扉から、アッサリアス准将が姿を見せる。

彼は室内へ入り様、ジロリ...！とギュンターとアイリスに鋭い視線を向け、ディアヴォロスとデーダルデスに一礼し、フォルデモルドが腰を上げたその席に、着く。

ララッツが動かないのでフォルデモルドは仕方無く末席に着き、どっか！と腰を降ろすと腕組んで、やっぱりオーガスタスに激しい視線を送った。

がオーガスタスは態度も変えず、気づく様子すら見せない。

ララッツもアイリスも内心肩をすくめた。

『だから、器が違う。と言われるんだ』

デーダルデスは中央の椅子に掛け、左右にずらりと並ぶ若く激しい猛者達が睨み合うのを見回し、内心の吐息を押し隠し、口を開く。

「ディアヴォロス左将軍所属の隊に四人が配置済みで、私達アルフォロイス右将軍所属隊で、五人を引き受ける事が既に、決まっている」

レッツァディンが肩を揺すって怒鳴る。

「それをこれから、話し合うのでは無いのか?!

既に決まった。とは、どういう事だ！」

デーダルデスはその激しい横やりに冷静さを崩す事無く、レッツァディンに顔を向ける。

「書状でとっくの昔に、シャーネンク隊員配属先の希望を各隊に聞いている。その返事を今日、受け取っただけだ」

ノルンディルが異論を唱えた。

「...ならこの会議は無意味だろう！

違うか?!」

激しく吠えるその男に、年長のデーダルデスは顔色も変えない。

「ムストレス准将から色々とディアヴォロス所属隊長らに、意見があると言うのでわざわざこの席を、設けた迄だ。

右将軍はどうしても外せない予定で出席出来ないが、遺恨を残さないよう話合うようにとの、伝言を頂いた。

が、意見をしたいとお申し出のムストレス准将ご本人も、右将軍同様欠席の御様子だが？」

その皮肉な言い様にレッツァディンは顔を揺らし、少し気まずそうにつぶやく。

「王族の大切な用事が既に決まった日程であり、この意見は昨日問題が持ち上がり、言い含めたいと急遽決まった事で、兄はどうしても予定を外せなかった！」

がディアヴォロスが、素っ気なく言う。

「言い訳はいい。代理の貴方で構わない。

シャーネク隊の配属の話は済んだと考えていいな？」

その他にもお話が？」

ノルンディルとレッツァディンは配属の話がこんなに呆気なく終わると思わず、つい顔を見合わせる。

そして、ディアヴォロスの落ち着き払った顔を見つめ、レッツァディンが断固とした口調で告げる。

「舞踏会の席での君の部下達の無礼に、責任者として注意勧告をお願いしたい」

ディアヴォロスはレッツァディンを見つめ、小声で告げる。



が低く通る声音は、穏やかにその場に響き渡った。

「どんな無礼です？」

ノルンディルはつい、顔を伏せるアッサリアス准将に視線を送り

「...夫有るご婦人を構わず誘うのは無礼極まりなく、ましてや一夜を過ごす等言語道断だ！」

ギュンターは思わず俯いて吐息を、吐く。

レッツァディンも口を開く。

「そして優先されるべき身分の女性がその取り巻きにわざわざ並んでいたと言うのに、無視するとは無礼だとは思わないのか?!」

オーガスタスが尋ねるように隣のローフィスを見つめ、ローフィスはついアイリスに視線を振ったが、ディングレーもギュンタ

一も、誰の事だ？と首を捻った。

アイリスが咄嗟に口を開く。

「発言の許可を頂きたい」

打てば響くようなアイリスの対応に、デーダダルデスはこの場で一番若輩の青年について、感嘆してささやく。

「どうぞ」

アイリスはレッツァディンを見つめ、低い声でつぶやく。

「貴方が口にされたのは、アンリッシュ嬢の事ですか？」

レッツァディンは、顎を上げてアイリスを見下す。

「彼女の身分を、知っているだろうか？」

アイリスは上目使いにレッツァディンを見つめ、だが一步も引く様子を見せず早口に答えた。

「王族だ。だが彼女が私を取り巻いたとは思えない。

取り巻いていた女性達の、隣に居たのでは？」

ディングレーもギュンターも、アイリスのその大胆な詭弁に思い切り呆れ、ローフィスは笑いを堪えるオーガスタスの大きな肩が揺れるのを、横の席で見て、思わず肘で小突いた。

レッツァディンはその静かな気迫で押し切ろうとするアイリスに呆け、だが気を取り直すと告げる。

「では本人に聞け！」

ディングレーがつい、顔を上げる。

レッツァディンが部屋の扉の前に居る召使いに顎をしゃくると、
召使いは一つ頷き、

扉を開けて部屋を出た。

ノルンディルはディアヴォロスを睨み付け

「もう一人の話は済んで無い」

と尊大に告げる。

ディアヴォロスは微笑むとささやく。

「で？一夜を過ごしたと言うご婦人は、ここにいらっしゃる
のか？」

アッサリアス准将は俯いたまま顔を下げ、ノルンディルは庇うよ
うに怒鳴った。

「不貞を働かされたご婦人がここに、顔を出せるか？

誘惑し、不貞をそそのかした男こそが処罰されるべきだ！」

ノルンディルはギュンターとアイリスのどちらを断罪すべきかと
、二人を交互に睨む。

がディアヴォロスは冷静につぶやく。

「ご婦人は一夜を共にした男性に不愉快な事をされて夫を裏切ったと。そうおっしゃられておいでか？」

ノルンディルは慚然。と腕を組む。

「当たり前だ！

その夫はどれ程の恥をかかされた事か！

名誉の問題だ。重大な過失だぞ?!」

ギュンターが二度も顔を上げて口を開きかけ、その都度オーガスタスとローフィスに交互にジロリ！と視線で押し止められた。

が、ディアヴォロスが顔を下げ一つ、吐息を吐くとつぶやく。

「そう、重大な問題だ。

ご婦人には悪いが、それ程重大な問題を、本人抜きで判断する事は出来ない」

デーダルデスも請け負った。

「ご本人の口から、どれ程ひどい状況かをぜひお聞きしなくては。

罪人を断罪しようが無い」

ディアヴォロスとデーダルデスは申し合わせたようにお互いを見、頷き合う。

デーダルデスが、言った。

「ご婦人にご出席頂けるか？」

勿論、この事はここに居る者は誰も、外に洩らしたりはしないと宣誓を行う」

これにはアッサリアス准将が慌てた。

「妻は気分がひどく悪く、この席に顔は出せない！」

「あら。私ならここに居ますけれど？」

デーダルデスの背後の扉が開き、アリーナが顔を覗かせる。

その時のアッサリアス准将の驚愕の表情はまるで幽霊を見たように真っ青で心底びっくりし、椅子から飛び上がりそうで、皆がつい准将の顔を凝視する。

彼女はつつかつかと室内に入り、デーダルデスに、そしてディアヴォロスに頷いて挨拶に代え、皆に...特にギュンターを見つめて艶然とにっこり微笑み

「殿方の大事なお仕事のお会議であるに関わらず、私がここに在籍いたしますご無礼、謝罪申し上げますわ。

けれど...先程のご婦人が、もし！

私の事だとおっしゃるのなら！」

アッサリアスが慌てて叫ぶ。

「お前だとは誰も、一言も言っていない！」

「あら。そうなの？」

じゃ、誘惑されて不貞を働かされたご婦人。とはどなた？」

ノルンディルは腹を括れ！とアッサリアスを睨み付けて、怒鳴る。

「ご婦人。夫の名誉をお守りになる気がおありなら！

一介の隊長の誘惑に乗って夫に汚名を着せるのは、得策ではありませんぞ！」

だがアリーナは、ノルンディルににっこり。と笑った。

「間違えていらっしゃるわ。准将。

誘惑したのは私の方でその一介の隊長さんは、私に口説かれたのよ」

その場の皆は呆然としたし、デーダダルデスは一気に吹き出し体を前に折って、くっくっくっ！と笑いを漏らしながら

「ああ...失礼...」と言って、それでも笑い続けた。

婦人は見つめるディアヴォロスににっこり微笑むと

「ですから、その隊長さんが文句がおありなら、私は告発を受ける気がありますわ？」

ディアヴォロスはご婦人に、やはりその神秘的で男らしくて美しい微笑を湛えて微笑み返し、つぶやく。

「その隊長は私の推察ですと、とても楽しい一夜を過ごし、貴方に感謝こそすれ、告発等微塵も脳裏に、浮かばないでしょう」

ギュンターはそのディアヴォロスの言葉に、腕組みして俯いて顔を、下げた。

だがディアヴォロスは言葉を続けた。

「ですが貴方は夫がある身。

他の男性をその貴方が誘惑されたとあっては、夫である准将が貴方の愛を疑いたくなり、相手の男に嫉妬するのも当たり前」

が、准将が咄嗟に怒鳴る。

「嫉妬等、しておらぬ！」

だがこれにはディアヴォロスも婦人も同時に、立ち上がって顔を真っ赤にし、憤慨する准将を見つめた。

ディアヴォロスはすましきり、片眉上げてささやく。

「しておられぬのか？」

それはご婦人が他の男を誘惑しても、無理からぬ事です」

准将はつい、そう言った若年の左将軍を見つめる。

「どうして無理からぬ事なんだ?!」

アリーナが意地悪く言った。

「だって、私を愛していたら嫉妬してあたりまえでしょう？」

ディアヴォロスも眉間を寄せるとつぶやく。

「嫉妬していない。と言う事は、愛してない。と同様の言葉だ」

ノルンディルもレッツァディンも...フォルデモルドもララッツも
見つめる中、准将は顔を真っ赤にした。

デーダルデスが笑いを堪(こら)え、准将に注進する。

「その...体面を構われるのであれば我々に対してでなく、ご婦人に例え嘘でも『嫉妬で体が沸騰し、相手を斬り殺さないと気が済まない程君を愛している』と言うべきだ。

経験から申し上げますが」

准将は年上のその男の言葉に、顔を真っ赤にして俯いた。

「失礼な発言をお許し頂けるのであれば」

アイリスの言葉に皆が一斉に、一番年若いその男を見つめた。

「『他の男と過ごす貴方を一瞬でも想像しただけで、胸が嫉妬で焼けて生きて居られない程辛い』とおっしゃるのも、効果的です」

皆がその大袈裟さに眉間を寄せまくり、ノルンディルが馬鹿げ

てる！と異論を唱えようとした途端、婦人はにっこり微笑むとその美男に

「さすがに大勢の女性に取り巻かれるだけのお方だわ。

貴方に切なげにそんな事を言われたりしたら、どんな女性も感激で胸がいっぱいになる事でしょう！」

ノルンディルはしゃしゃり出て目立ちたがりの男を睨んだが、婦人はつい、ジロリ！とムストレス派の男達を睨め付けて言った。

「そんな風に謙虚で熱烈に、ご自分の胸の内を明かされる男性はここには殆どいらっしやらないばかりか、戦いに明け暮れるお仕事第一の殿方にはまるで思いつかず、むしろそんな言葉を婦人に告げるのは、恥だと皆さん、思っていらっしゃるようですよわね？」

准将は言われて顔を下げ、が上げてアイリスを、嫉妬の標的と睨み付け、ギュンターはアイリスが自分に成り代わり、准将の嫉妬を引き受けようとしている事を悟り咄嗟にぼそり。とつぶやいた。

「准将婦人と知らず彼女と時を過ごした事を謝罪する」

爆弾を投下したようなその発言に、そう言って顔を真っ直ぐ上げるギュンターを皆が一斉に凝視し、その場はしん。と静まり返る。

アイリスは隣の上座寄りに座るギュンターの美貌の横顔を見つめ

眉を寄せたし、オーガスタスは顔を上げ、ローフィスは首を横に振りながら俯き、ディングレーはローフィスとディアヴォロスに交互に視線を、向けた。

レッツァディンとノルンディルがこの機にギュンターを非難しようとして勢い込んで同時に立ち上がり、が婦人がすかさずつぶやく。

「謝罪の言葉より、私が貴方に言った、夫についての言葉をこの場で披露して頂けると有り難いわ？」

ギュンターはその紫の瞳を丸くしてアリーナを見つめ、頷く彼女に促されてつぶやく。

「五人も愛人を抱えちゃ、妻を構ってる暇は無だって...あれか？」

アリーナはたっぷり頷き、准将は顔を真っ赤にして俯いた。

アリーナはじっ。と夫を見つめ、言った。

「私が嫉妬すると、想像もしてないから五人も居るの？」

私も五人と浮気しないと、貴方に私の気持ちは、お分かりにならないのかしら？」

准将が、咄嗟に顔を上げる。

が、アリーナはプイ。と背を向け、さっさと元来た扉を開けて退出する。

ボタン...！

准将は呆然と扉を見つめ、デーダルデスがつぶやく。

「どうぞ。後をお追いに成っては？」

准将はがたん！がたん！と音を蹴立てて椅子を退けながら慌てて扉に駆け寄り、開けて扉のその向こうの、妻の姿を追った。

問題提起の張本人が消え、レッツァディンとノルンディルが呆然とする中、ディアヴォロスが横列の後席に座すギュンターに振り向き、言った。

「夫婦間の諍いに巻き込まれ、丁の良い当て馬にされた愚かさを、繰り返さないで約束出来るな？」

ギュンターはディアヴォロスの柔らかな声音と見つめる神秘的な瞳に一つ、頷く。

そしてディアヴォロスは今だ立ったままのノルンディルとレッツァディンに顔を向けると言った。

「もう一人のご婦人についての、お話をされては？」

と顎をしゃくる。

とっくに室内に入り、壁際で一部始終を見ていたアンリッシュが、ディアヴォロスの発言に気づいたように顔を揺らし、レッツァディンはアッサリアス准将で挫かれた出鼻を、取り戻そうとアンリッシュに顔を向ける。

「アイリスに、言いたい事があるんだらう？」

アンリッシュはじっと見つめるアイリスの濃紺の瞳から顔を背け、そっとレッツァディンの横に寄ると小声で告げる。

「話が違うわ。どうして私がここでお話するの？」

レッツァディンが怒鳴る。

「奴が！お前は自分を取り巻いて無いと！

そう抜かすからだ！」

アンリッシュは顔を赤らめ、即答した。

「あら...！

勿論、取り巻いたりしていないわ！」

この言葉にレッツァディンは目を丸く、したし、アイリスは笑った。

誇り高い彼女の虚勢を見越すアイリスの策略に、オーガスタス始めローフィスもディングレーも呆れて、一番末席の年下の男を見つめる。

だが驚く長身の叔父を見上げ、小柄なアンリッシュはもどかしげにささやく。

「でも...！解るでしょう?!叔父様。

彼は私が側に居たんだから……！

私に声を掛けるべきだわ？違う?！」

レッツァディンはだが、眉間を寄せ唸った。

「それは奴に聞け！」

アイリスは直ぐ言葉を受けてささやく。

「…貴方がお側にいらっしゃった事に気づかず、本当に申し訳ありませんでした…。

その…とても大勢の女性がいらっしゃったので。

私の不始末をどうぞ、お許し下さるとそう、おっしゃって下さい」

ディングレーもギュンターもアイリスが、その茶番を大真面目に演ずる面の皮の厚さに呆れ、ローフィスはオーガスタスに肩をすくめて見せた。

がオーガスタスもディアヴォロスも、物の良くわかったアイリスの頼もしさに、庇護は必要無いな。と目を見交わし笑う。

アイリスの、本当にすまなそうな表情に、アンリッシュはそれでも頬を染めると、ぽそり。とつぶやく。

「では次の舞踏会では必ず私と踊ると。

そうお約束して頂かなくては」

だがアイリスは困惑しきって首を傾けた。

「けれど貴方は王族だ。

迂闊に触れぬ身分のお方。そうでしょう？

同じ一族のディングレー殿も、それは女性との接し方に、慎重でいらっしゃる」

ディングレーは俯き、内心つぶやく。

(『...いらっしゃる.....?』)

アンリッシュの、顔が揺れた。

アイリスは言葉を続け、ギュンターは腕を組んだまま体を前へ、深く倒す。

「ましてや貴方は、ご婚約もまだの女性の御身。

迂闊に触れる事は許されない筈。

違いますか？」

アンリッシュは、自分の望み叶わずアイリスが約束を断る様子に、狼狽えきって首を振り、それでもレッツァディンに、アイリスに意見してくれるようその腕を掴み求め、覗うように長身の叔父を見上げる。

がレッツァディンは勿論、ディアヴォロス派の色男を追っかける

アンリッシュを恥知らずだと思っていたから、ついアイリスに同意した。

「自分の身分を、自覚すべきだ」

レッツァディンに見下ろされてそう告げられ、途端アンリッシュは瞳に涙を、滲ませた。

ギュンターはチラとそれが視界に入ると顔を下げ、ディングレーでさえ、熱烈にアイリスと過ごす一時を夢見るアンリッシュを、可哀相だと思って深い吐息を吐く。

が、アイリスは畳みかける。

「叔父君は正しい。

貴方は下賤の身分の者が気安く触れぬ、高貴なご身分です。

私等にその御手を取る栄誉を気楽にお与えにならず、どうかその身分に相応しい男性にそのお手を、お許し下さい」

ローフィスが覗くと、ノルンディルもレッツァディンも、謙(へりくだ)るアイリスに、大いに満足していた。

がアンリッシュには彼が、身分を理由に、丁寧な言葉で自分を拒絶したのだと、解っていて微かに、震えて俯いた。

ディアヴォロスがそんな彼女に同情し、そっとささやく。

「貴方の身分に相応しい、貴方が手を取って欲しいと望む男性は

他にいないのか？」

アンリッシュはずっと焦がれてやまないディアヴォロスにそう言われ、遠い瞳をし、だが思わずそれを口にした。

「居ますわ。けれどそのお方は叔父がとても、嫌っていますの。そのお方と踊り等踊ったら……………。

そのお方はもっとひどく！叔父に嫌われそして……そしてきっと、酷い目に合わされます」

レッツァディンにはそれがディアヴォロスの事だと解り、年下のいところを睨め付ける。

アイリスは自分を庇いそして…アンリッシュの気持ちを救おうとするディアヴォロスをつい、はらはらして見つめた。

がディアヴォロスはにっこり笑うと

「でも一度だけ。そう貴方に乞われたらその男性はきっと、どれ程貴方の叔父に嫌われようが、必ず貴方の手を取ると思います」

レッツァディンはディアヴォロスのその大胆な発言に顔を揺らしたし、アイリスはつい、そうアンリッシュを誘うディアヴォロスを、目を見開いて見つめた。

オーガスタスもローフィスも…そしてディングレーもギュンターでさえもが、ムストレス派との対立が更に激しくなる彼らの長(おさ)の、その発言に顔を下げたものの、泣き出しそうなアンリ

ツシュの気持ちが救われた事にほっと、安堵の吐息を漏らした。

アンリッシュはそう言った、長い間焦がれ続けたディアヴォロスの男らしく美しい顔を見つめ、微かに涙ぐみ、躊躇いながらささやいた。

「でも私...その男性にそう言われただけできっと...。

踊り等しなくても.....」

俯いてもう何も言えない彼女を見、レッツァディンは思い切りディアヴォロスを、その猛禽のような蒼の瞳で睨む。

アンリッシュは叔父の様子に気づき、慌ててそっと顔を上げて言葉が続けた。

「もうきっと、満足ですわ」

ディアヴォロスは微笑を送り、彼女にそっと、そしてとても優しく頷いた。

アンリッシュが退席し、デーダダルデスもこれで話し合いが終わった。と、ディアヴォロスとレッツァディンにそれぞれ頷き、会議の終了を告げる。

「告発は以上ですな？」

レッツァディンもノルンディルも種が切れた事を、不本意ながら認めざるを、得なかった。

まぜっかえす事は可能だ。

ララッツは思った。

アイリス同様詭弁を使って。

が...身内の不名誉をこれ以上、掻き回されたく無いレッツァディンを、敵に回してまでもする必要は無い。

だから....

別の手を、使うしか無いだろう。

こちらの憂さを、晴らすには。

一同が席を立ち、皆が庭に面した両開きの扉に進む中、ローフィスはオーガスタスの背に続いて戸口へと歩き、何げに振り向いた時、咄嗟にギュンターに近づくララッツを見付け、ギュンターの後ろに居るアイリスに鋭い視線を送る。

アイリスはローフィスの素早く促す視線に気づき、前のギュンターの様子に急いで視線を送る。

ララッツがギュンターの耳元で小声でささやく。

「ローランデが去った途端、准将婦人に乗り換えか？

お前はおおっぴらに愛している等とほざいていたが、実はローランデを愛してなんかいず、単に我々と喧嘩をする争いの種として抱いてたんだらう？」

ギュンターの、顔が揺れる。

「お前に散々慣らされた体だ。

今頃ローランデは北領地[シェンダー・ラーデン]で、別の男を作ってお前同様、楽しんでいる事だらうな？」

ギュンターがぎっ！と目を剥く。

アイリスは咄嗟に、ギュンターとララッツの間に、素早く割り込んだ。

自分の事はともかく、ローランデを侮辱されるとギュンターはキレる事を熟知したアイリスの機転で、その拳は割って入ったアイリスの腹に、深く突き刺さった。

周囲はぎょっ！とし、フォルデモルドは火蓋を切ったララッツに続き、背後からローフィスの襟を掴み引き倒そうとし、オーガス

タスが咄嗟に振り向いてフォルデモルドの豪腕を掴み止め、左手でローフィスの腕を自分の方へと引くと、掴むフォルデモルドの腕をローフィスの襟から、きつく握って引き剥がした。

ノルンディルがララッツの背後からギュンターに殴りかかろうと殺気を送り、ディングレーが一步前へ出、ノルンディルを激しく睨み付けてその歩を、止める。

ギュンターは殴った筈のララッツがその後ろに居て、拳をのめり込ませた相手がアイリスにすり代わり心底ぎょっ！とした。だがアイリスはずしん！と重い拳を思い切り腹に喰らい、一瞬理性がその痛みで消し飛んでつい、反射的に拳を振り上げた。

「...アイリス...！」

ディングレーはぎょっとして理性を飛ばすアイリスを見つめ、ノルンディルはアイリスが味方に振る拳に笑った。

顔を襲う鋭い一撃を、ギュンターはその反射神経でぎりぎりに避け、がアイリスの拳はギュンターの右肩に突き刺さった。

アイリスは拳に当たる感触にはっ！と顔を上げた。ギュンターは深く挟るアイリスの拳に顔を一瞬しかめ、が拳を手でゆっくりと払い退け、つぶやく。

「...丁度、凝っていた場所だ」

アイリスは顔を歪め、何か言おうとし、向こうではオーガスタスが、拳を振り上げようとするフォルデモルドに笑って告げていた。

「奴の後ろ襟に付いた虫は俺が、取る。

手を、引っ込めてくれないか？」

拳を振り上げ殺気を飛ばす自分に向かい笑顔を見せるオーガスタスに、それでもフォルデモルドは拳をぶつけようとし、がオーガスタスの背後からディアヴォロスの射るような視線が突き刺さり、一瞬にして背筋が冷えて凍り付き、仕方成しにフォルデモルドは笑って促すオーガスタスに、何とか頷き返して拳を下げた。

ギュンターは痛みに顔を思い切りしかめる真正面のアイリスを見、咄嗟に横に並び肩を、抱き支える。

ララッツとノルンディルが、背を向けるギュンターに、迫ろうと歩を踏み出し、ディングレーが手を伸ばし割り入って、自らの背でギュンターとアイリスの背を庇い、顔だけ振り向いて二人に告げる。

「手を、貸してくれなくて結構だ。

ありがとう」

ララッツは一瞬の機会を阻まれて顔を歪め、ノルンディルは俯くと肩で大きく、吐息を吐いた。

ディングレーは二人の背を庇いながら、背後のララッツとノルンディルを自分の背で、牽制し続けた。

ローフィスの肩を抱いて背を向けるオーガスタスに、レッツァディンがざっ！と歩を踏み出し、良く訓練されたオーガスタスは咄嗟にその殺気に振り向く。

が、ディアヴォロスがオーガスタスの背へと一瞬で滑り込み、レッツァディンの真正面に顔を出すとレッツァディンはその拳をつい、いつも殴りたいと思っている男の顔に、振った。

思い切り腰を入れた拳がぶん...！と空を切り、見るとディアヴォロスはもう、オーガスタスの背を促し、とっくにその場から消えていた。

まるでその拳等気づかぬように背を向け、振り切った気配に振り向き、微笑んで別れを告げる。

「失礼する。

まだ私と配下との話し合いが終わってないので」

レッツァディンはそのすかした年下のいところを激しく睨め付け、怒鳴りそうになった。

『戻って、自分の相手をしろ！』と。

が、その時先にアッサリアス婦人と准将が消えた扉から、とっくに退出した筈のデーダダルデスが顔を覗かせる。

「何か、問題でも？」

レッツァディンははっ！と我に返り、そう声を掛ける年上の右将

軍重鎮の男に視線を振る。

そして...視線を戻した時、敵の姿は全て、掻き消えていた。

既に駆け込むなりギュンターは痛む右肩に手をやり、ディングレーはギュンターの支えを無くして膝を折り崩れ落ちるアイリスの肩を、慌てて抱き支える。

ローフィスとオーガスタスは右肩に手を当てて顔をしかめる、それ以上アイリスを支えられないギュンターを見、吐息を吐き顔を、見合わせた。

がディアヴォロスがディングレーを柔らかく押し退け、アイリスにそっと屈み、その腹に手を、添える。

アイリスは激しく痛むその激痛が、ディアヴォロスが手を当てた途端、柔らかくに引いていくのに気づく。

顔を上げると、ディアヴォロスの整った男らしい顔がそこにあつて、そっと告げる。

「すみません...」

ディアヴォロスは苦痛の中謝罪を告げるその見事な若者に急いで、つぶやく。

「謝罪はいい....」

痛みを全部は取れない。馬の、振動に耐えられる程度だ」

アイリスは額に脂汗を滴らせながら、頷く。

「十分です」

ディアヴォロスが顔を上げ、ディングレーに頷き、ディングレーは再びアイリスの肩を支え、今度ディアヴォロスは背を向けるギンターの右肩に手を、伸ばす。

ギンターはその手に気づいて咄嗟に振り払ったものの、痛み顔に顔をしかめつぶやく。

「俺はいい...！」

その分、アイリスを見てやってくれ...！

使う“力”は限られてるんだらう？」

ディアヴォロスがオーガスタスに振り向く。

オーガスタスは肩をすくめ、ディアヴォロスに頷く。

「奴は俺がお守りする」

ギンターは咄嗟につぶやく。

「左で手綱は取れる」

オーガスタスは吐息混じりで教練からの一つ年下の悪友の、横に寄ると痛む様子の右肩を見つめ、つぶやく。

「いいから、いい子で俺の前に乗っている」

ギンターは当然目を、剥いたが。

ディアヴォロスは少し心配げに眉を寄せ、ローフィスを見つめてささやく。

「どこも、痛めてないな？」

ローフィスは笑って肩をすくめた。

「オーガスタスは素早い」

ディアヴォロスも、微笑んで頷いた。

「本当に...すみません！」

アイリスを前に乗せ、腹に手を当てて馬をそっと駆るディアヴォロスはまだ謝罪するアイリスの耳元に、そっとささやく。

「君の謝罪の理由が私に思い当たらない。

もしかしてそれは、ギュンターに言うべき言葉では？」

アイリスはディアヴォロスの手から流れて来る、人外の“気”が激痛を和らげ、少し生気を取り戻したようにしゃんとし、だが小声でつぶやく。

「...未熟でした...。

ギュンターに殴りかかる等、奴らを喜ばせるだけなのに...！」

ディアヴォロスは敵に隙を見せた自分を猛烈に後悔し、歯噛みして悔しがるアイリスに気づき、微笑った。

「君はとても誇り高い」

アイリスはそう告げたディアヴォロスに、振り向きたかったが、腹が痛んで出来なかった。

ローフィスがアイリスの馬を引きながら、隣の馬上でぼそり。と告げる。

「お前まさかギュンターがあの時点でもう殴りかかると、思わなかったんだろう？

つまり...ギュンターは俺達が思ってるよりもっと、煮詰まってるって事だ」

アイリスは思い当たって、つい顔を、揺らす。

そして小声で口早につぶやく。

「...それでもだ...。咄嗟に...殴られてつい、腹が立つ自覚さえなく怒りにかられて反射的に拳を振ってしまった。

止めに入ったのに。

あんまり無様で、貴方の顔すら潰してしまった！」

アイリスはそう言って背後のディアヴォロスに振り向きたかったが、やっぱり出来なかった。

が、ディアヴォロスはくすくす笑う。

「君は自分が幾つか、忘れているだろう？

年相応の君の失態は皆がほっとする」

だがアイリスは俯いて言った。

「敵の前なのに？」

戦いでそれは死を意味する」

ディアヴォロスはでもその手から、やはり「左の王家」が代々受け継ぐ人外の友、『光の国』の光竜の力を注ぎ彼の痛みを和らげながら、優しくささやいた。

「だが一人では無い。

味方が君の近くに居る。

何でも自分一人で出来てしまう程君は有能で頭がいいが、その分孤独に陥りやすい」

アイリスはだが、不満げに言った。

「でもとっくに『可愛げが無い』とみんなに思われているのに」

ローフィスはその通りだ。と吐息を漏らしたし、ディアヴォロスはますますくすくす笑った。

「今更？」

アイリスは彼の前で、大きく頭を揺らし、頷いた。

「そう思われてるなら意地でも貫き通すつもりだったのに」

ローフィスが、呆れて言った。

「十分意固地だ。

これ以上意地を張りたいのか？」

アイリスは横に馬を並べるローフィスに顔だけ向けてつぶやく。

「意地は張り通さないと、価値が無い」

ローフィスはやれやれ。とその三つ年下のまだ十代の若者の気構えに、呆れを乗り越して馬鹿だ。と思って肩をすくめる。

ディアヴォロスはローフィスに、まだ笑いながらささやいた。

「誇り高い。と言ったろう？」

ローフィスは吐息混じりに、一つ年上のカリスマに告げた。

「...紙一重だがな」

ディアヴォロスはもっと笑い、アイリスは背後のディアヴォロスのその笑い声を聞いて俯くと、大きな溜息を、一つ吐(つ)いた。

横に並ぶディングレーが視界に入る。彼が自分の馬を引いているのを見つめ、ギュンターはオーガスタスの前に騎乗し、吐息を吐く。

「お前、俺なんか前に乗せて、気色悪く無いか？」

背後でオーガスタスが笑った。

「まあ...前に乗せてる黄金(きん)の豹に喰い付かれないかだけは、ちょっと心配だ。

とても獰猛だからな」

ギュンターは悪友の言い様に苦虫噛んだ。

「...いつ暴れ出すか解らない野生の豹を護送してるつもりか」

「つもりじゃない。護送してる。

手負いの獣は、とびきり危険だしな！」

ギュンターが歯を剥き、ディングレーが横からそれを見てぼやく。

「解ってたら挑発するな。

だが...アイリスが避ける隙さえなくもう拳が突き刺さってる。ってどれだけ腹にため込んでたんだ？」

ギュンターが、痛めた右肩毎横に向き、ディングレーに怒鳴る。

「アイリスだと知って、殴って無いぞ！」

ディングレーは肩をすくめ、オーガスタスが背後で言った。

「それを誰が信じる？」

ギュンターが激しく金の髪を振る。

「ララッツだと思ったから思い切り振ったんだ！」

オーガスタスがディングレーに言う。

「奴が腕を引くのを、見たか？」

ディングレーは首を横に振り、吐息を漏らす。

「引きもせず突き出して、あの鍛えた腹のアイリスをあれ程痛ませるんだ。

どれだけの威力なんだか」

ギュンターが、嗤った。

「安心しろ。

俺だってお前の拳は半端無いと思ってるから、お前に拳を向ける真似はしないさ！」

ディングレーは疑惑の瞳を、向けた。

「俺より喧嘩の強いオーガスタスに、しょっ中拳を向ける奴の言葉なんか、信用出来るか！」

ギュンターが咄嗟に怒鳴る。

「奴が！俺の喧嘩の仲裁に入るからだ！」

ディングレーもオーガスタスも、やれやれと首を横に振った。

「止めるしか、ないじゃないか....」

誰も仲裁出来る奴が居ない場で、ノルンディルを瀕死に成る程殴り付けて、最前線に送られたのを忘れたのか？」

ディングレーが言うと、オーガスタスの落ち着き払った声がした。

「...ローランデに振られて別れ別れだってのに、どうしてララッツの挑発に乗る？」

ギュンターは背後の悪友に振り向きたかったが右肩が軋むように痛み、髪を振っただけで諦め、がその分怒鳴りつけた。

「ローランデが北領地[シェンダー・ラーデン]で！」

男を作ってるとか抜かしやがって彼を、侮辱した！」

オーガスタスの真面目な声がした。

「奴が言うから侮辱に聞こえるが、もし事実ローランデが作ってたら。とお前実は四六時中心配してないか？」

ギュンターの顔が思い切り揺れ、ディングレーもオーガスタスも、やれやれ。と吐息を吐く。

ディングレーがぼそり。とつぶやく。

「幾らお前に慣らされてたって、あいつはまっとうな男だから女を作られたら。と心配するのが筋だろう？

ローランデは妻とは上手く行ってないんだろう？

仮にも大公子息だ。愛人なんか山程作れる身分だ。

まあ...誠実な男だから、もし作ったとしたら、多分遊びじゃなく本気だろうが」

ギュンターが俯き、拗ねたようにつぶやく。

「本気で惚れた女が奴に出来たら、身を引くさ！」

背後でオーガスタスがぼそり。と言った。

「本気で惚れた男が出来たら、どうする？」

ギュンターが即答した。

「あの誇り高い男が男相手に本気で惚れるか！」

これにはディングレーも同意し、頷く。

「まず、有り得ない」

だがオーガスタスは言った。

「仮にだ」

ギュンターは俯くと、顔を揺らす。

ディングレーはつい、まるで考えるのも怖い。と言うかのように心臓をばくばくさせる様子のギュンターの青冷めた表情を、喰い入るように眺めた。

「……………成る程。

床上手。と評判を取るお前だもんな。

確かにお前が側に居なきゃローランデも、単に生理現象で男が、欲しくならないとも限らない。

例えお前程良く無くっても」

ギュンターの首ががっくり垂れ、オーガスタスがぼそり。とつぶやく。

「結局お前、いつでも自分のした事で自分を、追い込んでるじゃないか」

ギュンターはとうとう我慢出来ず、思い切り肩を捻って振り向き、一瞬右肩に駆け抜ける激痛に顔を思い切り揺らし歪めた。

オーガスタスは痛みに声も出ない様子のギュンターを見つめ、吐息混じりにささやく。

「アイリスの拳を舐めるな。

奴の優雅で品のいい様は、はったりだぞ？」

ディングレーも頷く。

「中身は俺達と変わらぬ程獰猛なのにな！

隠してる所が姑息で気に入らない」

ギュンターは痛みに息が詰まって暫く歯を喰い縛ったが、呻く。

「そう...思ったら俺を挑発するな！

怪我人だと忘れてるだろう？

もっと労れ！」

「自業自得だ」

ディングレーが言い、オーガスタスも背後で唸った。

「挑発に乗る、お前が馬鹿なんだ」

ギュンターはメチャクチャ悔しくて歯ぎしりしたが、二人の言う通りだった。

のでそのまま、歯を擦り合わせて怒りを晴らした。

ディアヴォロスの私邸に戻る頃、アイリスは激痛が去り、鈍い痛みに変わっているのに気づく。

先に見事な黒毛馬から降りて、両手を差し出すディアヴォロスに顔を向ける。

アイリスは暫く、躊躇った。

が、滅多に無い機会だったので、甘える事にした。

ディアヴォロスの胸に飛び込むように馬上から降り、その首に両腕を巻き付けてしがみつき、彼に背に腕を回されて抱きしめられ、それを支えに足を地に着ける。

やはり、屋敷から出た時の息が止まりそうな激痛は起こらず、代わりにずきずきずきと、鈍い痛みがギュンターの拳が突き刺さった箇所を疼かせた。

「大丈夫そうだ」

アイリスはそう言う彼の肩から顔を上げると、もう最近オーガスタス以外では滅多に味わえない『自分より背の高い男』を顔を上げ、傾けて見つめ返し、微笑んだ。

「貴方のお陰です」

ディアス(ディアヴォロスの愛称)は良く鍛え抜かれた鋼のような

体をしていたから、彼の肩も胸もとても硬く逞しく、そして秘やかな感じがした。だがその顔立ちは、整いきった美しい顔をしていて、鼻も顎も頬も完璧なラインを描き、だがその中の神秘的な透けた瞳は強い意志が籠もりその癖...とても頼もしくて優しい印象を醸し出していた。

彼の全身から漂う人外の者の“気”が、彼を包み込んで護り、そして周囲の者へ庇護するように時に、流れる。

特別な男。カリスマ。どれも彼を言い表すには、不十分な気がした。

その黒く細かで艶やかな巻き毛はだが、「左の王家」の男が持つ特有の激しい気性を感じさせ、けれど剥き出しのレッツァディンと違い、良く洗練され抑えられて内に秘められ、だが時に表面に吹き出し、それが彼の穏やかさを突き破る時、ドキドキする程の男らしさを爆発させる。

アイリスは間近に彼を見つめつくづく、自分が女に産まれなくて良かった。と思った。

きっと惹きつけられ、彼を自分一人の物に出来はしないと、悲嘆の涙に暮れた事だろう。

だがこんな感想を持つ事も、彼の中に居る『光の国』の『光竜』はお見通しだろうけれど。

肩を支えるように抱かれて、室内へと促される。

「かなり、痛みは引いたようだ」

その、良く通る低い、耳をくすぐるような男らしい声音。

アイリスは吐息を吐いた。

「アンリッシュは勿論貴方の取り巻きが出来れば、私を決して取り巻いたりしなかったでしょうね？」

そう言ったのは彼の声が耳元で響いた途端、それをずっとうんと近くで聞き続けて彼を独り占めしたい。と思った幾人もの男女の気持ちが、理解出来たから。

隣でローフィスが肩をすくめた。

「フテる気持ちも解るが、アンリッシュの気持ちが少しでも理解出来るなら、お前を取り巻く女達の気の毒さにも少しは気を、配ってやる事だ」

ディアスはローフィスの言う通りだ。と言うように、隣でくすくす笑う。

アイリスはバツが悪そうに、俯いた。

オーガスタスは馬から飛び降りるギュンターに視線を振り、背後に立つと背に手を添える。

ギュンターはとうとう一つ年上の悪友を見上げて首を振る。

「まだ護送中か？」

オーガスタスが笑い、ギュンターは顔をしかめた。

ディングレーが呆然。と立っているのに二人は気づき、ついその視線の先を見る。

アイリスがディアヴォロスに抱きつくようにして馬から降り、甘えるように顔を傾けて微笑を浮かべる様子がそこにあって、二人は固まるディングレーの背を見てやれやれ。と顔を見合わせ、首を横に振り合った。

居間に通され、その手のこんだ高価な建具にさすが王族。とギュンターが内心の吐息を隠し、そっと首を回し覗う。

義弟シェイルを挟んでディアヴォロスと付き合いのあるローフィスは初めてでは無いようで、どっか！と金糸の縫い込まれた布張りの豪華な長椅子に腰を降ろして腕を背もたれに乗せる。

ディアスはまだ、アイリスに気遣う視線を振り、肩を支えた手を解きアイリスを一人がけの椅子に座らせた。

つい、オーガスタスもギュンターも揃ってディングレーの様子を伺うが、ディングレーは一つ吐息を吐くと、近くの椅子に静かに腰掛けた。

「アイリス。君は暫く休んでいきなさい」

ディアヴォロスが椅子に掛けるなりの発言につい、ディングレー、オーガスタス、ギュンターは揃ってアイリスの様子を伺うが、アイリスはディアスを見つめて素直に一つ、頷いた。

ローフィスがつい、三人の様子に呆けて視線を送る。

ディアス(ディアヴォロスの愛称)は顔を上げるとギュンターを見つめる。

「君もそうすべきだが...聞かないだろうな？」

オーガスタスとディングレーに見つめられ、ギュンターは吐息混じりにぼそり。と言う。

「大した事は無いからな」

ディアスはやせ我慢だと知ってはいたが、アイリスに気遣いを見せ、平気なふりをするギュンターに付き合った。

「...だがシュランゴン酒がある。

たっぷり振る舞うから、皆で飲んで行くといい」

オーガスタスとローフィスは滅多に名前すら聞かないその超高級酒の名に、驚愕に目を見開いたが、ギュンターはディアヴォロスの微笑に『お見通しだな』と吐息を吐くと、ぶっきら棒に言った。

「...そう言われちゃ、残って賞味するしか無いだろう？」

ディアスはくすくすと愉快そうに笑った。

「配属の件だが...アイリス。

君の隊は、ラーゼンホークを。

ディングレー。君はドッドルシュテンを。

ギュンター。君の所はキムディクと、アーベルシュテンだ」

アイリスもローフィスも...そしてギュンターでさえ、人の心を読んだようなその采配に、目を見開きディアスを見つめる。

そして...改めて彼の中の『光竜』の偉大さを知った。

「...何だ？」

ディングレーが長椅子のローフィスに顔を傾ける。

「ドッドルシュテンは無口な、実直な男だ。

キレると半端なく暴れるが。

多分お前とは上手くやれるだろう」

ローフィスに言われ、シャーネンクの隊員達の横を通り過ぎた時見た、一人の男を思い出した。

野戦のテントで奴は隊服の上半身はだけ、無法者らしく櫛の通ってない黒髪を背で無造作に束ね、その筋肉で盛り上がった肩と胸を剥き出し、胸を張って通り過ぎる自分にジロリ...！と視線をくべた。

がその黒に透けた瞳は荒くれ者の外見に反し、思っていたよりずっと誠実そうに感じてつい、その男を見つめ返した。

ディングレーはディアヴォロスの不思議を良く知っていたから、一つ了承した。と頷くと、ギュンターを見つめる。

「お前の所も、そうか？」

ギュンターは俯くと

「キムディクは小柄だがはしっこい。

アーベルシュテンは目端の利く頭の回る男で、こっちの目線だけで察する。

どっちも比較的言葉が通じ、拳を振る必要の無い男達だ」

アイリスもつぶやく。

「ラーゼンホークは戦闘でただ一人、略奪をしなかった男で...仲間に嫌われている」

オーガスタスがつぶやく。

「お前、略奪を止めようとして仲間に殴られてた奴を、庇ったろう？」

ギュンターも思い出して吐息混じりに言った。

「あの時も奴が殴られてる真っ最中に飛び込んでたな！

お前、飛び込み癖を何とかしろ！」

アイリスはギュンターに向くと、真っ直ぐな濃紺の瞳を向け静かに怒鳴る。

「君の時は拳が降って来るとは思わなかった！」

ローフィスがジロリ。とギュンターを見る。

「なだめる間がある。と奴は思ってたから、飛び込んだ途端腹に突き刺さってて、さぞかしびっくりしたろうな」

アイリスは唇を噛むと顔を怒りにしかめ、低く唸る。

「腹に喰らった瞬間、かっ腹が立った。

君の拳同様、自分でも止める間も無く思い切り」

ギュンターは、頷く。

「遠慮無しに俺を殴ったな」

アイリスも頷くと言った。

「君は私だと思わず殴ったが私は拳を振る相手が誰かを、知っていた」

それ故自分の方が罪が重い。と言わんばかりの口調で、オーガスタスがじっと聞いているディアヴォロスをチラリと見たがつぶやく。

「知っていても、知らないも同然だ。

だって殴られた怒りで理性どころか意識が一瞬、飛んでたんだろう？」

アイリスはオーガスタスを見、ためらうように呻く。

「まあ………そうだけど」

ギュンターは思いきり顔を下げた。

「…つまり、キレたのか？」

アイリスも顔を下げる。

「…認めたくないけれど、そうだ」

オーガスタスもローフィスも顔を、見合わせた。

ディングレーがそっと聞く。

「…初めてキレたのか？」

ローフィスが顎をアイリスにしゃくってぶっきら棒につぶやく。

「な訳無いだろう？」

お前ら同様負けん気が強くて手が早いのを、理性でこの年で抑えてる」

オーガスタスもくすくす笑う。

「誰かさん達は抑えるなんて頭の隅にも無く、やりたい放題だ

がな！」

ディングレーとギュンターが同時に顔を上げて異論を唱えた。

「俺にだって分別くらいはある！」

ディングレーが低く怒鳴ると、ギュンターも。

「ちゃんとノルンディルに挑発されても我慢してただろう?!」

オーガスタスがやれやれ。と首を横に振り

「話し合いの席で拳を振ろうなんて、思うだけでも問題外だ。我慢に入るか」

ローフィスも言った。

「お前、常識をまず覚えろ」

ディアヴォロスが二人にそう言われて悔しそうに唇を噛むギュンターについくすくすくすと笑い、皆は見つめて呆けた。

がディアヴォロスはそっとオーガスタスとローフィスにつぶやく。

「よく、慣れてる方だ。野生の豹にしては」

オーガスタス同様ディアスにも人間扱いされず、ギュンターはつい笑っている彼を睨むが、ディアスは気づくとますますくすくす笑う。

「皆その野生の豹があんまりしなやかで美しく、孤高の生き物で

手が届かないので、彼に懐かれただけで光栄を感じる。

そしてその豹が戦って敵に喰らい付いても皆、豹の習性を知っているから許してしまう。

いい加減、それが自分だと自覚を持つ事だ」

「...つまりみんな俺の事を人間だと思って無いのか?!」

ローフィスが怒鳴った。

「人間だと思った途端猛烈に腹が立つしな！」

ギュンターがローフィスを睨み返して怒鳴り返す。

「だって人間だろう！俺は！」

がローフィスは言い返す。

「まだ幼年なら修正が可能だがその年じゃ、頭の中身を人間に戻すのは並大抵じゃない。

安心しろ。人間の皮を被った野獣はこの近衛に、五万と居るから」

ギュンターはだが、まだそう言ったローフィスを睨んでいた。

がローフィスはディアスに視線を向ける。

「アッサリアス准将婦人はどうして来て居たんだ？」

ディアヴォロスは笑いを止めると、ローフィスに視線を向けた。

「会合が開かれると知って私の元に彼女から使いが届いた。
だからその使いをそのままデーダダルデスの元へ走らせた。
彼の許可があれば会合に出席してギンターの弁護をして欲しいと」

ギンターは途端、ディアスに殊勝な表情を向ける。

「彼女は何て？」

「自分が誘ったせいで君を危険な目に合わせたく無いと。
でも……………」

「でも？」

ローフィスが尋ねる。

「もし君にお咎めが下るともう彼女の誘いに乗る馬鹿な男は居なくなるから。

君の為だけで無く自分の為でも、あるようだ」

そう言ってアイリスをそっと見つめる。

ギンターもつい、アイリスに視線を振って言った。

「あいつをもしかして、婦人は諦めて無いのか？」

「利口なアイリスはムストレス派准将婦人の自分と関わると、面倒に巻き込まれるから避けるに決まってる。とお考えのようだ」

アイリスはつい、顔を思い切り下げ、ディアスはやっぱりくすくす。と笑い、ギュンターを見た。

「随分君で満足したから、もう一人の評判も確かめたかったんだろう？」

ディングレーもローフィスも同時に呆れた溜息を漏らし、ギュンターを更にバツを悪くさせた。

項垂れるギュンターについ、アイリスはそっと言った。

「でも満足したからわざわざその君を庇いに、出向いて来たんじゃないのか？」

ギュンターは更に深い、吐息を吐いて項垂れる。

「二人切りに成った時かなりの時間一緒に酒を煽っていたし...その、彼女の瞳が青かったから....」

違うとは知っていたがつい...ローランデを思い出していた。

つまり...つまりローランデは自分から俺に抱きついたりしないしその...彼の方から口づけたりもしない。だから...」

アイリスはつい目を丸くしてギュンターの表情を覗き込む。

「ローランデが婦人のようだったら。と叶わぬ夢を追っていたのか？」

ギュンターは手を振り上げ...つぶやく。

「酒をしこたま飲んで、酔ってたしな」

ディングレーはとうとう、顎に手をやり、その哀れなギンターから思い切り顔を背けたし、ローフィスは顔を深く下げて、やっぱり深い吐息を長く、吐き出した。

だがディアヴォロスがそっと言った。

「彼は君が、自分が原因でムストレス派の挑発にむきに成って乗り、危険な目に合い続けて常に心配で胸が張り裂け、心に大きな負担を負っている。

故郷で休ませてやるべきだ。

それ位の気遣いは、彼を本当に愛しているなら出来る筈だ。

違うか？」

ディアヴォロスにそう言われ、その神秘的な瞳に見つめられたもののギンターはやっぱり項垂れた。

「そう...解ってても.....」

とても辛い」

ディングレーはついディアヴォロスに注進した。

「こいつは北領地[シェンダー・ラーデン]地方護衛連隊に空きが無いか、真剣に考えている」

ディアヴォロスは一つ、頷くが彼は低い声ではっきりと言った。

「近衛では特別には思われない。

戦闘中は皆、男の“夜付き人”と夜を過ごすので。

が、北領地[シェンダー・ラーデン]で抱かれる男は最早“男”では無い。

北領地[シェンダー・ラーデン]の最高身分である大公子息のローランデを、侮蔑に塗れさせ、地に落としたいのか？」

ギュンターは深く項垂れ、髪を両手で掻きむしった。

そして落胆した声でつぶやく。

「例え北領地[シェンダー・ラーデン]の地方護衛連隊に空きがあっても俺に、行くな。と？」

ディアヴォロスは頷くとささやく。

「私用で行くのとは訳が違う。

護衛連隊となればローランデはその長だ。

長が“男”で無ければその地位を、味方の筈の男達に奪り取られる」

ギュンターはローランデが、教練を卒業した**18**の時北領地[シェンダー・ラーデン]地方護衛連隊へ進む事を怖がっていたのを思い出した。

きっと...それを恐れていたのだ。

ローランデはまだ若く、自分を十分制御出来ず...ましてや自分で
すらそうだったから...地方護衛連隊の男達に“男”だと認めて貰え
ず父の期待に応える事が出来ずに、失墜するのを。

アイリスがそっと言った。

「...始めから叶わぬ相手だと...思い切れないのか？」

だがディアヴォロスはアイリスに言った。

「君は人の事は言えない。

重い病で明日をも知れぬ身だと、君から身を引こうとしたご婦
人と、結婚迄押し切っただろう？」

皆が驚愕に顔を、上げた。

結婚は彼の口から聞き、皆知っていた。

がアイリスは婦人を一度も公の席に伴わず、その真偽はいつも取
り沙汰されていた。

「相手の家は君の将来を思い、あまり公にすまいと式を断った
筈だ」

アイリスは悲しそうにディアスを見た。

「彼女もその父母も！

私を信用していない。私が年若く...重い病の彼女を引き受けるだ
けの責任が無いと...今でもそう思ってる！」

「それは違う。アイリス。

輝く未来ある君を陰らせたく無い。とご婦人もその御両親も心を痛めている。

君の情が深いから」

「でも彼女は私と居ると幸せそうに微笑む。

頬に赤味が戻り、瞳が生气に輝く！」

「彼らが心配しているのは、その生气が彼女の瞳から消えるのはもう、間もなくだと知っているからだ。

そしてその時の君の落胆を、見たく無い。

君が若く、輝くばかりに美しい若者だから」

アイリスの首が垂れ、ついディングレーもギュンターも、ローフェイスでさえもつい、そんなアイリスを驚愕の内に見つめた。

「君が自分の行動に、とても厳しいのはそのせいだし...若い自分を未熟と切って捨てるのもそのせいだ。が...彼女も彼女の御両親もとても君の事が好きだ。

輝くばかりの若さを持ち、明るい笑顔で彼女を包む君の事が、本当に好きだからこそ気遣ってる。

とても...残念なんだ。アイリス。彼女達は。

そんな君が自分達のせいで...暗く沈むのを見るのは」

アイリスは暫く、顔を上げなかった。ずっと...その濃い手入れの良く行き届いた艶やかな栗毛に顔を、埋もれさせていた。

が...顔を上げた時、皆がはっ！とする程の決意の表情を見せた。

「...お分かりでしょう？

私は最後迄演じられる。

大丈夫な自分を。

そして心配はいらないと、彼女に微笑み続ける事が出来る。

必ず」

その声は静かで、見事だった。

その濃紺の瞳は固い意志が溢れていたし、何者にも怯まず動じない、戦場で見せる時の瞳だった。

だがディアスは警告した。

「...逃げ道の一つくらいは用意すべきだ。

煮詰まったら私の元に来なさい」

ディアヴォロスに悲しげな瞳で見つめられ、『千里眼』と呼ばれるその男の言葉にアイリスは一瞬、唇を震わせたが言った。

「どうかお願いします。

私が貴方を訪ねなくて済むよう、祈っててはくれませんか？」

ディアヴォロスはゆっくり頷き、微笑を浮かべて言った。

「勿論、そうしよう」

酒が召使いによって運び込まれ、皆が使者の訪問で退出したディアヴォロス抜きで、その超高級酒の入ったグラスを傾ける。

皆アイリスの衝撃の結婚話に口が重く、がローフィスがそっとささやく。

「もう痛まないか？」

アイリスは顔を上げ、その時ようやく皆が自分の事で気まずい思いをしてる。と感じ、言った。

「幸い。彼の力はやはり凄い。

でなければ今この酒をこんなに美味しい。と思いながら飲んでたりはしない」

微笑むが、ディングレーもギュンターもやり切れないうように俯き、オーガスタスは二人の様子にやれやれ。と首を横に振る。

「意外にも念願叶って奴を殴れたんだ。

美酒を味わえ」

言われてギュンターは、咄嗟にオーガスタスに怒鳴った。

「そりゃ俺だって、奴だと思って殴ったんならすっきりするさ！

だがララッツを沈めようと思い、叶ってないんだぞ！」

ローフィスはやっぱり馬鹿だ。とギュンターを見た。

「ララッツを殴ってたら今頃全面戦争だ！

ノルンディルもレッツァディンも、フォルデモルドもやる気満々だったからな！」

オーガスタスもつぶやく。

「戦闘に明け暮れていたのに、いきなり平和に成って奴ら、元気を持ってあましてる。

そんなのに付き合う気か？本気で？」

ディングレーがぼそり。と言った。

「元気を持ってあましてるのは、こっちもなんだけどな………」

ギュンターも、今この平和な時にローランデが居たら、相思相愛は当然無理だとしても少なくとも二人の時間を、楽しめただろうに。と重苦しい吐息を吐く。

アイリスは思いついたように顔を上げてローフィスとオーガスタスを見つめる。

「...つまりディアヴォロスは………」

私が諦めずに彼女との結婚を押し切ったんだから、ギュンターの事は言えないだろうと...そう言ったのか？」

オーガスタスが即答した。

「当然」

ローフィスも頷く。

「ギュンターと全然変わらない」

アイリスはがっくり...！と首を落とす。

ギュンターが咄嗟に怒鳴る。

「...どういう意味だ？それは。

嫌味にも程があるぞ！」

アイリスは項垂れきった。

そして顔を上げず、掠れた小声で呻いた。

「黙っててくれ.....。

事実を認識するのに、暫く時間が要る」

ギュンターとディングレーは顔を見合わせ、憮然。とその年下の男を見た。

「.....駄目だ....。

だってどう考えても.....だって.....。

だって、私とは違う筈だろう.....？

ローランデはギュンターに愛されて不幸な目に合ってる筈な

のに……違うのか？」

顔を上げてローフィスとオーガスタスを交互に見る。

ギュンターが、沸騰した。

「どうしてそれを奴らに聞く！

俺に聞け！」

アイリスはその濃紺の瞳でギュンターを真っ直ぐ見、怒鳴り返す。
。

「だって君はローランデの周囲の状況なんてこれっぽっちも、見えて無いじゃないか！」

「惚れてたら周囲が関係あるか！

結局お前だって相手の両親に反対されても、押し切ったんだ
ろう！」

ギュンターが言った途端、アイリスは頭を抱えた。

そして情けない声で呻く。

「…私のした事はギュンター同様なのか？」

オーガスタスはいよいよそんなアイリスに感想を洩らした。

「…ショックを受けてるな」

ローフィスは頷く。

「自分は文明人だと信じていたらしいからな」

ギュンターが途端、目を剥く。

「どうせ俺は野獣だ！」

ディングレーがぼそり。とつぶやく。

「やれやれ…。

ディアヴォロスに女のように甘えてたのを突っ込んでやろう。
とってたのにな………」

アイリスが途端、埋めていた両手から顔を、上げた。

「ああ…。流石に彼相手だと女性の気持ち解る。

滅多に無い機会だからつい、思い切り抱きついてしまった」

さっきの話と打って変わって調子のいいアイリスについ、皆が凝視する。

ディングレーの瞳が陰しくなった。

「…やっぱり、そうか」

ギュンターは項垂れて吐息を吐く。

「思わずカンぐりそうに成ったぜ。

幾らお前でも流石に彼とは、寝て無いんだろう？」

アイリスは眉間を寄せるとそっとつぶやく。

「それは君だろうか？

私は君程節制無しじゃないぞ？」

オーガスタスもローフィスも顔を背け、ディングレーがつい二人のそんな態度を見、ギュンターが言った。

「この場で知らないのはディングレーだけだ。アイリス。ばっくられても無駄だ。

お前が下手したら俺以上の相手と寝てる事くらい、とっくにオーガスタスもローフィスも知ってる」

アイリスは二人を見たが、二人共アイリスから目を逸らした。

「...やっぱり？

でも二人共大人で礼儀正しいから、知ってても口に出したり態度に出したりしない。

第一、君を対象にしたら私なんててんで可愛いものだ」

「嘘付け！」

ギュンターが怒鳴り、アイリスは突っ込んだ。

「君の方こそディアヴォロスと、関係を持ったりしてないのか？
本当に？」

ギュンターが怒鳴った。

「近衛でローランデしか目に入らずそれでさんざ、二人(オーガスタスとローフィス)にいい加減にしろ！と怒鳴られてるのに、左將軍を口説いてる間なんか、あるか！

だいたいそれはお前の方がよっぽど怪しいだろう？

秘密主義だしな！

どうせ、結婚祝いも欲しくないんだろう？」

アイリスが怒鳴り返す。

「冗談だろう?!

私は盛大に式を挙げたいんだ!

君からも祝儀を、うんとふんだくりたいさ！

先が長くないなら素晴らしい式にして、思い出を作ってあげたいじゃないか！

待ってろ！

絶対相手の両親の信頼を勝ち取って式を挙げ、君からごっそり祝儀を、筆り取ってやるからな！」

ギュンターが、にやり。と笑った。

「お前にそれが出来たらその時は、俺の上着のポケットを全部はたいて有り金全部くれてやるさ！」

アイリスは怒鳴り返す。

「その時文無しに成っても後悔するなよ！」

オーガスタスもぼそり。と言った。

「有り金全部アイリスに取られ、金を貸してくれ。と俺に泣きつくなよ」

ギュンターはオーガスタスに怒鳴った。

「お前は誰の友達だ？アイリスか？」

オーガスタスは思い切り肩をすくめて言った。

「勿論お前の友達だが、勝ち目の無い賭けが絡むとあっちゃ、話は別だ。

アイリスが詭弁で自分の意見を押し通し、曲げた事が無いのを忘れたのか？」

ギュンターが途端、悔しそうに唇を噛んで言い淀む。

がディングレーは意外そうに目を見開く。

「...あんた本気か？」

既に結婚してるってのに女とああ不摂生に遊んでちゃ、アイリスは絶対無理だろう？」

オーガスタスが、茶目っ気たっぷりに微笑った。

「じゃ、賭けるか？」

負けた方がこの、シュランゴン酒を好きなだけ相手に奢るんだ」

ディングレーはそのライオンのような大柄で朗らかな男を、真っ直ぐな青の瞳で見据える。

「いいだろう」

ローフィスは呆れたようにオーガスタスを見た。

「本気か？」

奴は王族だぞ？例え負けて超高級酒を奢ったって、財布は痛まない」

オーガスタスはもっと笑った。

「だが“負け”に誇りは痛む」

ディングレーはつい、そう言ったオーガスタスを睨んだ。

がオーガスタスはローフィスに振る。

「お前は混じらないのか？」

ローフィスはそっ...と、アイリスとギュンターを見る。

「...冗談だろう？」

ローランデと恋人のように熱々に成りたい。と思ってるギュンターの夢は幻だと俺は確信してるのに。

それと同等馬鹿なんだろう？アイリスも」

ギンターもアイリスも、同時に叫んだ。

「幻だと確信?!」

「同等馬鹿って、どういう事だ?!」

ローフィスは肩をすくめる。

「だってディングレーの言う通りだ。

結婚した男は身持ちを固めるのが普通だがお前は変わらない。

それで本当に相手の両親の信頼を勝ち取るつもりか？」

がアイリスは目を見開いた。

「女性とちょっと親しく過ごしたら不貞なのか？」

食事をするのと変わらないのに」

そこに居る皆が一瞬言葉に詰まった。

アイリスは更に畳みかける。

「君達だって腹が減ったら食べるだろう？」

結婚したら妻が居る食卓でしか食事をしないのか？」

ディングレーが呆れ返って口を、開けたまま尋ねる。

「お前の“寝る”って、食事とイコールなのか？」

アイリスは不思議そうにディングレーを見つめた。

「君は、違うのか？」

オーガスタスとディングレーは同時に、ローフィスを見た。

ローフィスは二人が期待する言葉を言った。

「...やっぱりギュンター同様、ここ迄固まっていたらこの年で頭の中身の価値観を変えるのはまず、不可能だ」

アイリスはさっぱり解らず、まだ言った。

「だってギュンターは常識が無い」

ギュンターは言い返したかったが、自分の見解は正しい。と信じ切ってるアイリスに、何も言う言葉は、見つからなかった。

オーガスタスが、ぼそりと言った。

「くれぐれも俺と“食事”しようだなんて、考えないでくれ」

ローフィスも、ディングレーでさえもが頷く。

「俺も除外してくれ」

「俺もだ」

アイリスはギュンターを見た。

「...だって君だって思うだろう？」

食事だって誰とでもするもんじゃないと。

プライベートで特別な食事は」

ギュンターは真顔で尋ねるアイリスを、頭がおかしい危険人物のように見つめ、そっとささやく。

「そうだ。だから当然、俺とも“食事”しないよな？」

「どうしてそんな心配をするのか解らない。

だって君達として、美味しい食事を味わう気分になれるか？」

オーガスタスは安心したように心からほっとし、つぶやく。

「腹を下すな。間違いなく」

アイリスが、頷く。

「それどころかあんまり不味そうでもず口に、入らない」

皆の安堵の吐息がその場を埋め尽くし、アイリスはやっぱりそんな彼らは常識外れだ。と見解を下した。

が数日後、オーガスタスは笑っていた。

ディングレーが悔しそうに超高級酒を1ダースも取り寄せ、オーガスタスに手渡したので。

確かに彼に取っては手痛い出費ではあったが、ギュンターのような最悪な打撃では無かった。

ローフィスとギュンターは周囲から借りれるだけの金を借りてデ

ィングレーに突き付け、ディングレーは結婚式への贈り物として、更にもうハダースものシュランゴン酒をアイリスへと送り付け、三人は出席した式の席で自分達の送った酒を腹いせに、しこたま飲んで酔っぱらった。

その時の空は晴れ上がり素晴らしい晴天で、彼の結婚が真実だった。と知らされた悲嘆に暮れる女性達を尻目に、アイリスの笑顔はその青天の下、輝き渡った。

END